

高句麗王陵域における広開土王碑の相對的位置

——「墓上立碑」の再吟味を通して——

門 田 誠 一

1 広開土王碑文にみられる「墓上立碑」

中国吉林省集安市に所在する広開土王碑は高句麗史はもとより、東アジアにおける四〇五世紀の國際歴史解明に裨益するところ、その外形の巨大さにふさわしい。碑文の内容および碑と王陵との關係において、数多の研究がある所以であることも言うにおよばない。

碑と王陵の巨視的な位置關係については、その距離の近さからは太王陵に、碑と古墳および石室との方向からは將軍塚にと、それぞれ比定の点での根拠としてあげられてきた。

しかしながら、のちにふれるように広開土王碑が広開土王の陵墓のみを守墓するための目的をもつて立碑されたのではなく、その対象が広開土王陵が築かれた「國岡上」、つまり、集安の平野部に築かれたすべての王陵にかかわるものであるという見解も出されている。

碑と陵墓の關係についての具體的吟味の端緒の一つは、碑文自体にみられる「墓上立碑」という部分の吟味にある。これは広開土王陵のみにとどまらず、高句麗の王陵やそれ以外の古墳においても、ひいては高句麗における造墓や風習にも関わる問題である。とくに、近年においては、「墓上立碑」の風習を示すといわれる遺物も発見され

ているが、筆者はなお疑義をもつ点が多い。本稿は広開土王碑文（以下とくに必要な場合の他は「碑文」と略記）にみられる「墓上立碑」について、基本的な問題を整理することから、広開土王碑とこれによる効力が期待されていた王陵との物理的、相対的な位置関係を知る端緒とし、さらに広開土王陵比定についての基本的立論の要件にまで迫ることを目的とする。

そこで、まず、「碑文」にみられる「墓上立碑」の行文を簡単にみておきたい。碑文の中で「墓上立碑」に関する記述は第IV面の末尾にみられる。

「自上祖先王以来墓上不安石致使守墓人烟戸差錯唯國正（岡）上廣開土境好太王盡為祖先王墓上立碑銘其烟戸不令差錯（後略）」^①

この部分の釈読として、よく知られるものであり、かつ異なつた釈読の対極として、次に佐伯有清氏によるものと武田幸男氏によるものをあげておく。

（佐伯釈読）^②

「上祖・先王自り以来、墓上に石碑を安んぜず。守墓人の烟戸を使って差錯せしむることを致せり。唯、国岡上広開土境好太王、尽く祖先の王の墓上に碑銘を立てんと為て、其の烟戸をして差錯令めず。」

（武田釈読）^③

「上祖・先王自り以来、上に石碑を安んぜず、守墓人の烟戸を使って差錯せしむるに到れり。唯だ國岡上廣開土境好太王のみ、尽く祖・先王の為に、墓の上に碑を立て、其の烟戸を銘し、差錯せ令めざりき。」

碑文のこの部分については、文字の釈文については研究者間の異釈はほとんどみられないが、読み取れる内容としては、ここに示した両氏のように異なる見解がある。とくに佐伯釈読では「墓上立碑銘」と続けて読んでいる部分と、「墓上」を文字通り墓の「うえ」と読んでいるのに対し、武田釈文では「墓上立碑」と読み、また、「墓上」

は墓の「ほとり」と読んでいる。さらに、大きく異なるのは佐伯釈読と武田釈読では「盡為祖先」の部分の係り方である。

本稿でとくに検討にする点に関わるところでいうと、この部分のコンテキストからは「墓上立碑」という釈読が適当と考えられ、今にいたるまで現実には多くの論者はこの読みをとっており、佐伯の釈読は孤塁を守るものとなっている。本稿では定説どおり、「墓上立碑」という釈読を定点として検討をすすめていく。

また、「墓上」が墓の「うえ」であるか、墓の「ほとり」であるかについては、後にふれるように現在でも両説があるが、実は広開土王の陵墓と碑石との物理的な位置関係にとどまらず、両者のよったてつ背景、すなわち立碑の意味そのものに関わる本質的な関係が凝縮されている箇所であり、以下に吟味したいと思う。

その前に、主として中国の研究者によって、「墓上立碑」に関わる考古学的資料とされている高句麗古墳出土の石柱を、まず吟味の端緒としていくことにする。

2 高句麗古墳出土の石柱

これまでみてきた碑と王陵の位置関係やさらには碑文に記された「墓上立碑」と関連する実際の資料として、近年、集安で古墳に関わる遺物として発見された石柱が注目されている。

現在のところ、高句麗古墳から発見された石柱としては、次のものが知られている。

①山城下一四一一号墓出土例^⑦（図1の1）

山城子山城南側と通溝河との間の谷にある古墳で、一辺一三・六メートル、高さ約四メートルの截頭方錘形の封土墳である。埋葬施設は、いわゆる双室墓で、石柱（報文では石碑とする）は墳丘の東側北部の封土基部にあるが、傾いて底部が流出した封土に埋まった現状であるという。このような状況からみて、すでに原位置を動いていると

考えられている。石質は花崗岩質で、上部が細く、下部が太い八角形の柱状を呈し、頂部は丸みのある八角錘体に磨き出されている。八つの辺の長さは一定しないが、稜線はまっすぐにそろっている。石の面は平らで、よく整っている。底部の直径は〇・八五メートルで、頂端部の八角錘体の直径は〇・四八メートル、錘体の高さは〇・一四メートルで、全体の高さは一・一六メートルである。表面には文字などを刻んだ痕跡はみられない。埋葬施設からも出土遺物はない。この古墳について、方起東氏と林至徳氏は洞溝古墳群のなかでは中規模に属し、造りは粗雑で、高句麗の中小貴族の墓とみており、洞溝古墳群の編年のなかでは、五世紀中〜後葉のものと考えている⁽⁸⁾。

② 禹山下一〇八〇号墓出土例⁽⁹⁾ (図1の2)

禹山南麓傾斜地の南縁にあり、太王陵の西方にあたる。截頭方錘形の封土墳で、周囲の総長は約一〇〇メートルで、高さは約一〇メートルである。

この古墳ははやく、盗掘にあつており、盗掘口は古墳の南側のかなり高い位置にあり、羨道と墓室にまで達している。一九七六年に発掘された時には盗掘口はすでに埋まり、その埋土のなかから倒れた状態で石柱(報文では石碑とする)が出土した。この石柱は高さが一六〇センチで、基底部は四角形で正面は七三センチ、側面は九七センチで、下から二七センチまでは四角形のままで、それより上は横断面が八角形になるように面取りされている。表面は風化と剝離がかなり進んでおり、傷も多いという。報告では試みに拓本を採取してみたが、なんらの刻字の痕跡も認められなかったとされている。

築造年代について、方起東・林至徳両氏は六世紀の中〜後葉であろうと述べている。また、両氏はこの古墳が封土の規模の面からみて、王陵である可能性はなく、「せいぜい公卿貴族の子弟の墳墓である」とみている⁽¹⁰⁾。

この他に、高句麗古墳に関する石像物としては、禹山墓区三三一九号墓には墳丘から向かって左前方九メートルのところ、石製人物像があることが知られる⁽¹¹⁾。これは高さ一〇四センチ、幅五四センチの石像物で陰刻によって冠

をつけた半裸の人物像を表現しているが、ここで議論の中心としている碑あるいはその類似遺物とは、異なった性格をもつ石製品と考えられるので、ここでは一応対象の外に置くものとしておきたい。

3 碑の位置と立碑の意義の問題

これまでみてきた「碑文」のなかの「墓上立碑」という言葉と、高句麗古墳発見の石柱などに関連して問題にされるのは、「墓上立碑」をされた際の実際の碑の位置である。具体的には、

- (1) 墓上は文字通り墓の上を指し、碑は高句麗王陵の上に立てられた
 - (2) 墓上とは墓のほとりの意味であり、碑は高句麗王陵の傍らに立てられた
- という二つの見解が出されている。

(1) の考え方は、ふるくは鳥居龍藏が述べている。鳥居は広開土王碑文の守墓人・烟戸および「墓上立碑」の箇

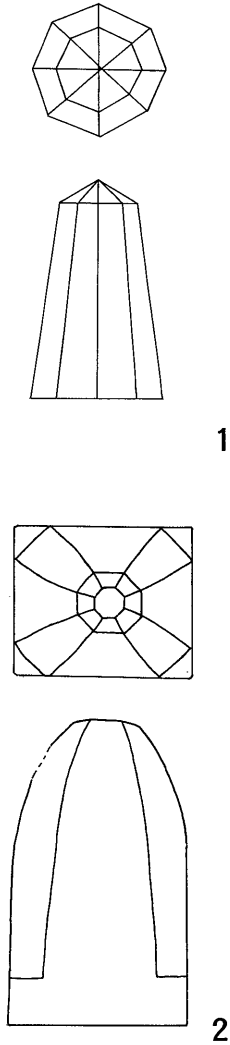


図1 高句麗古墳出土の石柱
 1 山城下1411号墓
 2 禹山下1080号墓
 (約1/20)

所について、「これ等陵墓の頂上には、碑石をたてしが如し。これは烟戸の事をこれに明記して看守事務の正確誤りなきことを期せんが爲にして、好太王の時に始まり、好太王の陵墓は勿論、其の以前の陵墓にも碑石を立てて明記せしこと」は碑文の明らかに示すところであるとして、その碑を立てた場所については、「…其の頂上に何等か建物の跡あると認むと云ひしは、多分此の石碑を立てし跡なるべし」と述べ、「墓上立碑」とは文字通り、鳥居が広開土王陵とみなす將軍塚の墳頂部に碑を立てたことであるとみている。さらに広開土王碑文にみられる「盡為祖先王」については、広開土王陵のみならず、それ以前の王陵すべてに立碑したという見解を示している。

これらの記述から、鳥居は広開土王碑がなんらかの下部構造をもなつて將軍塚の頂上部に立てられていたとみていたことが知られる。⁽¹²⁾

近年では、前項でみた山城下一四一一号墓、禹山下一〇八〇号墓の出土例から敷衍した方起東・林至徳両氏の見解があげられる。⁽¹³⁾

1 高句麗の王陵には守墓人において墓を守つてきれいにするのは、古くからある制度であるが、広開土王の治世（三九二〜四一二年）の以前には、碑を墓上に立てた例はなかった。

2 墓上に碑を立てるのは、高句麗では広開土王の治世に始まった。

3 墓上に碑を立てるのは、当初は高句麗王陵に限られていた。

4 広開土王は高句麗十九代の王であるから、「盡為先王墓上立碑」というのは、広開土王が立てた高句麗墓碑は少なくとも一八基あったことになる。

5 高句麗の墓碑は守墓制度の維持のための産物であるから、かなり特別な性質をもち、墓上に碑を立てるのは、広開土王が守墓人烟戸の絶えまない出入りが発生するのをみて取った措置で、その目的は烟戸を銘記し、守墓人に対する拘束を強化することであつた。

6 これらの墓碑にはいずれも碑文が刻まれていて、碑文の中の不可欠の内容は、それぞれの王陵に、規定に従って守墓人烟戸の数を割り振ることであった。

まず両氏は「墓上」という語は文字通り広開土王の陵墓の上を指し示すとする。さらに同じ論考のなかで、すでにふれた古墳から発見されている石柱についても、これを「石碑」であり、すべてが高句麗の墓碑とみて、高句麗には墳丘の頂上に墓碑を立てるというきわめて特異な立碑方式があったと推定している。そして、これは広開土王がはじめた「ことごとく祖先王の墓上に立碑した」ということの遺制であるとし、この後、これにならって他の貴族たちも墓上に墓碑を立てたと解している。ただし、現在知られている石柱（方・林両氏は「墓碑」とする）である山城下一四一一号墓、禹山下一〇八〇号墓出土例では両方とも文字がみられないのは、その年代がふるいたために表面の文字がすっかり磨滅してしまったためであるという。そして、「碑文」の記載とこれらの資料から高句麗の「墓上立碑」の制度は広開土王が始めて以来、すくなくとも六世紀中後葉までずっとつづいていたものとする。

しかしながら、「墓上立碑」、つまり古墳の頂上に碑を立てることを創始し、その習俗が盛行した時期であり、当然墳丘の頂上に碑が立てられていなければならない広開土王の陵墓を、太王陵とするにしろ將軍塚にあてゐるにしろ、いずれに比定するにしても墳丘の頂上には碑が存在しないという矛盾がある。

これについて方起東氏は以下のような考え方を示している。まず、方氏は太王陵から出土した「願太王安如山固如岳」という在銘碑が明らかに「特定の王陵に対する祝福である」とし、これをさらに太王陵と広開土王碑が近接し、また、「碑文」にみえる広開土王がはじめて墓上に碑を立てたという記述とも結びつけ、広開土王陵を太王陵に比定する。さらに、「碑文」の性格については、その内容のなかでも「守墓人烟戸」に関する記載が碑文全体の三六パーセントをしめることから古代の普通の紀功碑には該当しないものであるとして、紀功碑や墓への参道に立てる神道碑などではなく、「高句麗の墓碑」であると強調している。そして、このように方氏が広開土王陵に比定

する太王陵の「墓上」すなわち墳丘上に碑が存在しない点については、高さ六・三九メートル、底部が一・四八×一・三五×二×一・四六メートル、試算による重量が三七トン以上にもなるといふ碑の大きさから、「このように巨大なものを陵墓の頂上に立てようとしても、当時の技術力では達成不可能であり、また墳丘中の墓室が重量に耐え切れないので、臨時的措置として墓のそばの平地に立てるほかなかった」として、本来、墳丘の頂部に立てられるべき広開土王の「墓碑」であるにもかかわらず、「やむを得ず平地に立てることになった」ものとみている。このような経緯をもっているため広開土王碑と「墳墓との距離は非常に近くしなければならなかった」のであるとしながら、実際には碑と太王陵との間が約二〇〇メートル余りも離れていることについては、「当時、太王陵の墓域内に他の諸施設があつてからであらうか、あるいは、碑を建てた場所が守墓人烟戸三百三十戸の仮住居であつたからかよくわからない」と述べているのみである⁽¹⁵⁾。

いっぽう、太王陵と碑との間にすでに破壊された積石塚が四、五基あることから太王陵を広開土王陵に比定することについての反証とした池内宏の意見について、方起東氏はそれらが高句麗古墳であるとは限らず、渤海ないしはそれ以降の墳墓であることが比定できない以上、反証材料としては十分ではないとしている⁽¹⁷⁾。

現時点において、広開土王碑が陵墓の「上」にあつたとする立場から、もっとも詳細な論点を提示しているのが、この方起東氏の見解であらう。

これに対し、(2)の立場にたつのが現在の一般的な理解であるが、それらの基本となつたものを池内宏と今西龍の所論に代表させておこう。

池内は碑が「故王の一代の勲績を碑石に銘記すると同時に、守墓人烟戸を王陵の附近に配置するのも、勲績を永世に記念する所以であるが、故王の遺志としての「墓上立碑、銘其烟戸、不令差錯」は、立碑の主要な目的であつて、其の烟戸は第三面第八行乃至第四面第五行に銘記せられてゐるのである」としたうえで、「墓上」は「墓のほ

とり」といふ意であろう。即ち此の碑は豎立の目的並に銘文の内容の上から広開土王陵守墓人烟戸碑と称すべきものであつて、漢代以来支那に存する神道碑と同一視することはできぬ」とし、根拠は明らかにしていないが、「墓上」は墓の上ではなく、「ほとり」であると述べている。この考察を広開土王碑が中国の古代の墓制にならつて建てられた神道碑とする関野貞らの見解に反対の根拠とし、さらには守墓人烟戸碑たる広開土王碑の対象となる墓は太王陵であることを述べるにいたる。¹⁸⁾

今西も「墓上立碑は陵墓の封土の頂上に碑を立てしといふにあらず、墓側なるべし。此制は広開土王以後の王もとりにならんに、今日、高句麗王陵と認むべきもの皇城坪に又は平壤附近に多く遺存すれども、広開土王碑の外に其一断片をも未だ発見せず。」とし、根拠の詳細な提示はないが、広開土王碑が王陵の上ではなく、傍らに立てられたことを述べている。¹⁹⁾

また、武田幸男氏は碑文の墓上立碑の部分にふれて、「墓上、つまり墓のほとりに、碑を立てる」というのは、まさしく広開土王墓のほとりに『広開土王碑』をたてたことなのであり、…とし、広開土王碑文中にみられる「國岡上」、「塩水上」などという「上」はすべて「ほとり」「周辺」を示していると述べ、同一文中の使用法に字義を求めるといふもつとも妥当な根拠を提示している。さらに、広開土王碑が「いずれかの古墳頂上に直立していたとは、碑石の現状からして信じられない」と述べている。²⁰⁾

朴時亨氏は「碑文」の墓上立碑の部分に関しては、広開土王陵以前の高句麗王陵には一度も石碑を立てたことがなく、広開土王が遺言として、「…ただ、自分の陵だけでなく、これまでのすべての先王陵にみな石碑を建てよと命じた」ことは認めながらも、このような碑が一つも残っていないことに点については、「この遺言が執行されなかったとみるのが妥当であると思われる」と述べている。その根拠としては「それは高句麗人の長い伝統的慣習によるもの」であつて、「平壤遷都以後の時期にも、高句麗王陵あるいは個人の墳墓に碑石を残したものはない」と

し、朝鮮三国時代のその他の地域の例もひいて、「高句麗を含めた三国時期の朝鮮においては、陵碑、俗人の墓碑は人々がそれほど力を入れる施設ではなかったということである」と述べている。²¹⁾

李亨求・朴魯姫の両氏は、碑文の解釈から、広開土王以前の王陵にもすべて碑を立てたことは明瞭であり、逆に広開土王以前には陵墓に碑を立てなかったことがわかり、このような風習は、中国の後漢末の建安十年（二〇五年）と魏晋代に出された「墓前禁碑令」の影響があつたものではなかったかとみている。²²⁾

高句麗王陵と碑の位置関係および立碑の歴史的意義に対するこれまでの主な見解を紹介してきたが、次に中国における「墓上」「冢上」という用語、用字について一瞥し、そのうち、これをも参考とした私見につなげたいと思う。

4 漢代の「墓上」「冢上」「祠堂」

広開土王碑文中にみられる「墓上立碑」について、「墓上」とされた立碑位置を中心に、これまでのおもな見解を一瞥してきた。中国における陵寢制度を大観した楊寛氏は戦国時代中期から前漢代を通じて陵と寢（死者の靈魂が日常生活を行うと考えられた場所）が結合し、陵墓の頂上あるいはその傍らに作られていたが、後漢代になると、「上墓」すなわち陵寢に赴いて行う墓祭が行われるようになったと述べている。²³⁾ここから「墓上」あるいは「墓上」という言葉はもともとは、墓の「うえ」を指したことが考えられるが、陵寢制度の変化にともなうて、その意味内容が変わったことが推測される。

そこで、まず、「墓上」という語の用法と意味を、いくつかの類例と解釈をあげてみていき、その後、これと具体的に対照することのできる考古学資料として、後漢代の石祠堂の代表的な例をみてゆきたい。

一般に著聞する例としては、『史記』孔子世家の名高い故事をあげねばならない。すなわち、孔子が死に、泗水

の川岸に葬られたとき、他の弟子たちは服喪すること三年にして互いに別れを告げて立ち去ったが、ひとり子貢のみは「墓の側に廬（仮り小屋）をむすび六年のあいだとどまって、そののちようやく立ち去った²⁴」という記述である。この場合、子貢が仮小屋をむすんで六年もの間暮らした、この「冢上」の意味は、いかにしても孔子の墓の上とみるのはいかにしても不都合で、やはり「墓の側」「墓のほとり」とみるのが穏当とせねばならない。

また、『史記』呉太伯世家のなかの有名な伍子胥の逸話のうち、彼がその最期に残した呉王夫差を呪う言葉のなかに、「樹吾墓上以梓」という言葉があり、これを含んだ文も、「わしの墓の側には梓を植えよ。〔呉王夫差の〕葬具（棺）にできるように。わしの目を抉り取って呉の都の東の門にかけよ。越が呉を滅ぼすのを見てやりたい。」と現代語訳されるように、「墓のそば」「墓のほとり」というふうに通じることが多い。

また、同じく『史記』晋世家には、重耳すなわち文公が斉の桓公を補佐すべく、斉に行こうとする際に妻に対して、私を待つこと二五年にして、帰って来なければねその時は嫁に行け、と言ったのに対し、妻は笑いながら、二五年も経てば、「吾冢上」の「柏の木も大きくなっているでしょう。しかしながら私はあなたさまをお待ちしよう」と答えている。この場合の「冢上」も、「墓のほとり」と解されることが多い²⁵。

わずかな例だが、「墓上」「冢上」という表記は墓や冢の「そば」や「ほとり」の意味と解釈される場合が多いようである。もちろん一方では物理的な描写としての「墓上」「冢上」が文字どおり、墓の上部を指し示す場合もあるが、とくに後漢代では墓祭を行うという場合の「冢上」は墓の「ほとり」「横」という意味で用いられることが多い。

具体的にその例をみてみよう。漢代において、墓に関わる施設の一つとして祠堂がある。漢代の理想的な墓を賦に託したものとして、張衡の「冢賦」があるが、これによると墓をつくるには周囲の地勢を観察して適当な地を選び、整地した後、方角を定めてから墓道と墓室をつくる。墓域は竹垣で囲み、内部には霊木を植え、祭祀の壇を整

える、という。そして、水路や道路が生前住んだ館に通じていることが望ましく、こうすれば死者の霊は安んじ、子孫に福祿が下りるとい⁽²⁷⁾う。

そして、このような「冢賦」の墓に対する考え方を、より細かく示したものとして、漢の弘農太主・張伯雅の墓が『水経注』に記されている。これをひくと墓域は石垣で囲まれ、門の前には石製の双闕があり、参道の前には石獸がならぶ。墳丘の前には「石廟」があり、その前には石碑がたっており、墳丘の裏は川から水をひいた庭園にな⁽²⁸⁾っている。

また、『水経注』にみられる張伯雅の墓の平面配置の概念図が、はやくに示されているが、そこにみられる石廟、石闕、石碑、石獸などの施設は、武氏祠にみられる石闕、石獸、祠堂、墓碑などに名残をとどめるものといわ⁽²⁹⁾れる。

『太平御覧』に引く風俗通のなかの周覇の話は「冢上」での祭祀の様子を活写していて注目される。すなわち、北海の相であつて周覇は故郷に息子を遣わし、臘日に祖先の墓参りをさせたが、その際に「能く鬼を見る」ことで知られていた主簿の周光を同道し、祖先の霊が供物を楽しんでいるかどうかを確かめきそうとした。周光は周覇の息子が冢上で供物を捧げるのを後ろから窺っていたが、「神座」に座つて肉を食べていたのは粗末な服を着た屠者の霊であり、肝心の周覇の祖先の霊は「陰堂の東西廂」をうろうろしていて供物に近づけない。実は女兒を生んだ周覇の妻が、同じ時に男児を産んだ屠者の妻と密かに交換して育てていたのが周覇の息子とされていた、云々、と⁽³⁰⁾ある。

この話自体は志怪小説風であり、記述の真否はともかくとして、このような墓祭が行われた祠堂は「冢上」にあり、また、祖先の祭祀をする際に「上冢」という語が使われていることがわかる。

墓にかかわる施設の中でも祠堂は、前漢後期から後漢の末期までつくり続けられた地上施設の一つとされる。祠

堂では祖先をまつるための行為が行われたが、このような墓祭は文献上にもみられ、たとえば『後漢書』には皇帝が功のあった臣に帰郷して「上冢」を許したという記事が散見することが佐原康夫氏によって指摘されている⁽¹⁾。墓のかたわらにある祠堂の位置については、先にあげた文献の記述に加えて、考古学の成果によって実際の遺構が知られている。

孝堂山の石祠堂（後漢中期頃以前に建築）は発見時は破壊された状態で個々の画像石が出土したが、その後の復元的考察によって墳丘の南端に南面して立てられていたとされている⁽²⁾。フェアバンクが調査した山東省金郷県の朱鮪墓では墓室の南北中軸線の延長上で南に一〇メートルほど離れた所に南面して建てられていたとされる⁽³⁾。江蘇省

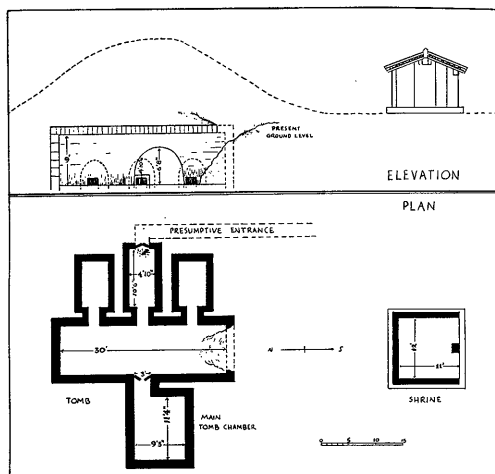


図2 「朱鮪」墓の墓室と石祠堂

徐州銅山県青山泉白集の画像石墓（報文では後漢末頃とする）に付随する祠堂もやはり南面し、位置としては墓室の側面から南側に約八・五メートル離れた場所から発見されている⁽⁴⁾。同じく徐州銅山県洪樓の画像石墓でも、墓室の西側四・五メートルの地点で祠堂の画像石とみられるものが発見されている⁽⁵⁾。天津市武清県の鮮于璜墓（延光四年〔紀元一二五年〕没）では墓室の正面南側から六メートル離れた位置から墓碑（延熹八年〔紀元一六五年〕に立碑）とともに祭祀用とみられる建物の基礎がみつかった⁽⁶⁾。

これらの例ではすでに封土は残っていないかったので、祠堂とみられるものとの、より詳細な相対的位置関係は推測するしかないが、おそらく封土の周縁部に建てられていた

という、フェアバンクの推測は正しいと思われる。⁽³⁷⁾ (図2)

つまり、祠堂は一般的には墓室との位置関係で言えば、五〇メートル程度離れ、多くの場合は南側の封土の裾の部分に建てられていたとみられている。ただし、その位置は必ずしも墓門の正面にあらず、また常に南側にあるとも限らない。これについては、佐原康夫氏が指摘しているように、祠堂の位置は墓室だけでなく、墓域全体の平面規格とも関連して、かなり融通をきかして建築されたものと考えられる。⁽³⁸⁾

ここで再び、先に『水経注』などの記述によってその実態をみた祠堂の位置と対照検討すると、「冢上」で行われる祭祀の場所とされる祠堂は実際は墓の傍らにあったことが知られ、「冢上」の「祠堂」とは我々の感覚で理解する墓の「上」ではなくて、墓の「傍ら」であることが、文献と考古資料との吟味から知られるのである。

5 「碑文」の布告対象と立碑場所

広開土王碑と広開土王陵の位置関係について、すでにふれたた「墓のうえ」と「墓のほとり」という二つの立場を吟味する際に参考となる例として、とくに墓すなわち冢の「上」としての用語例、用例に注目して中国後漢代を中心とした「冢上」祭祀についての例をあげてみた。その結果、いくつかの記述をひいて概観したように、中国後漢代を中心とした用例では祖先の墓所としての冢に関する「冢上」の祠堂は「墓のほとり」に位置したことがわかった。そして、このような祠堂を用いて、後漢時代には墓祭が季節ごとに「冢上」すなわち墓のほとりで行われていたことも知られた。また、文献の記載でみたように「上冢」とは墓に参ることを意味していたとされている。

しかしながら、このような後漢代の祠堂の関する用語例・用語法を、そのまま広開土王碑文自体の解釈にあてはめることは隠当とは言えまい。書体、書風の観点からは、「永和十三年」（三五七年）という紀年を有する安岳三号墳や「永樂十八年」（四〇八年）の墨書紀年のある徳興里古墳、そして紀年はないが文章の内容から五世紀盛期に

活躍した人物であると考えられている「牟頭婁」という人物の墓であるとみられている牟頭婁などの広開土王碑と時代的に前後する高句麗古墳の墨書墓誌には西域で出土した六朝時代の写経の影響を想定する見解もある³⁹。また、広開土王碑文に使われている異体字が北魏の「寇演墓誌」（五一九年）などと類似するとし、北魏との文字文化の交流や、主として七世紀以前の中国・朝鮮半島・日本の金石文の比較から、中国北朝の東魏・北斉から高句麗・新羅をへて日本へという字体の流れを推定する見解もあるが、それは「碑文」を構成する要素としてみられるのであり、使用されている言葉の個別的用法、用例について無前提に中国の例をそのままに適応させて理解することはあまり意味のないことであろう。すでに浜田耕策氏が指摘しているように、広開土王碑は高句麗の碑文であることを常に念頭におかなければならず、そうでない場合は、これまでの広開土王陵比定論争のなかで、碑の位置づけを中国における神道碑、紀功碑、墓碑などの枠内でのみ理解しようとした方向と異ならないことになり、これを前送としなければならぬ。

この点ではすでにふれたように、武田幸男氏が広開土王碑文そのものの中から「上」という用法を検討されたことがもつとも基本的な方法であろう。ただし、中国の史・資料を広開土王碑文の語句解釈のテキストとするのではなく、中国での同じ語句の用法・用例が、具体的にはどのような文脈のなかで、いかなる実際的狀況において使用されているかをみて、その脈絡自体を「碑文」解釈の参考とすることは無為ではなからう。

また、いっぽうにおいては耿鉄華氏のように、高句麗王陵の陵園制度が秦漢代以降の中原地域および三燕など北方地域の影響のもとに形成されたという見解もある⁴⁰。これをそのまま認めるかどうかは別としても、主として漢代以降の中華世界における冢墓の祭祀のなかで祠堂と墓の祭祀行為における相対的關係や物理的な配置についての基本的認識は、広開土王碑とその効力の対象となる陵墓の有機的構造をさぐる際の端緒とはなろう。

やや悔渋な表現となったが、すでにみたように主として中国・後漢代の「冢上」「墓上」という語句を使用する

際に、墓に対して祭祀を初めとしたなにかの行為をなす際には、「墓のほとり」という意味で使われていることが明らかである。このような認識をもとにして、今日においても、たとえば信立祥氏の「論漢代的墓上祠堂及其画像」という論文に示されるように、漢代を中心として行われた祠堂は「墓上」すなわち「墓の側」「墓のほとりに」あつたことが基本として論が展開されている。⁽⁴³⁾

高句麗王陵と前漢代の墓制との関係は武田幸男氏も示唆しているが、中国での墓上祠堂や墓上祭祀を参考としながら、ひるがえって広開土王碑文の場合において、「墓上」という語が、どのような文脈で使用されているか、その文脈をみてみよう。

「碑文」の該当部分では「上祖・先王より以来、墓上に碑をたてていなかったために守墓人烟戸が差錯した」というのであり、「ただひとり広開土王陵のみが、ことごとく祖・先王のために墓上に碑をたて、その烟戸を銘し、差錯しないようにした」という文脈で使用されている。要するに、すでに先学によって言われているように、「烟戸を銘し、差錯せしめない」ためという広開土王碑に立碑の大きな眼目がここにみられるのであり、ここから導かれる解釈は、「碑文」が常に守墓人・烟戸を記し留めるべき文章であつたことがわかる。この部分のみに対する言及ではないが、武田幸男氏が広開土王碑を「石刻文書」といい、また、碑自体を「法令宣布の恰好の媒体」としているのは、いみじくも「碑文」の性質と目的を言い当てている。⁽⁴⁵⁾

このように守墓人・烟戸を差錯せしめないことを立碑の一つの眼目としている広開土王碑において、その対象となつた人々の目にふれ、実際にその文字を拝することによって「石刻文書」たる「碑文」の実際的効果を期待されているわけである。この場合、これを拝する人々のすべてに、たとえば字義の正確または詳細な理解が必ずしも完全になされていなくても、物理的な実体としての「碑文」が対象とすべき人々に見えるところに、彼らにとっての同時代史であり、政治的および社会的規範としての「碑文」が存在しなければ立碑の目的自体がそこなわれるこ

ともなろう。

広開土王碑文がどのような人々を対象として刻まれた「石刻文書」であり、誰を読み手として、何のために立てられた「碑文」なのかという、これまで問われてこなかった重要な問題に対しては、近年、李成市氏が論じている。それによると、まず、「碑文」が「あくまで高句麗独自の制度である守墓役体制に関わる法令宣布の媒体」であることを確認し、立碑の目的がここに由来することを「碑文」解説の中心にすえなければならぬことを強調する。その上で、このような基本的性格を有する碑の「読者」を具体的に想定している。さらに「碑文」にみられる守墓人の売買を禁じた法令とその罰則規定の分析によって、広開土王碑文の立碑された時期には、高句麗王都である集安では「富足の者」（「碑文」の用語）が王陵の守墓人を転売したり、「擅（ほしい）まきに買」（「碑文」の用語）ったりする者が出現していたのであり、これはすなわち「王家の威信に挑戦する挑戦的な行為そのもの」であり、このような行為が可能な階層としては、王のみがなしうるはずの宗廟や社稷の祭祀を行ったり、王と同様に家臣団のごときを擁していたとされる高句麗の支配層が想定され、李氏が「支配共同体」とも呼ぶ高句麗の族制的色彩のつよい政治集団である五部を対象としていたと結論するにいたる。⁴⁶

このような李氏の見解に筆者も基本的に賛同するものである。すなわち、「碑文」に刻んだ文書内容である守墓人・烟戸を銘し、差錯しないようにせしめるための対象は、それらの力役を負担した「城民」「谷民」および新しく来降した「東海賈」などを掌握する階層であり、この点では高句麗の基本的人民である「城」「谷」を拠点や領域として人々を支配掌握したであろう高句麗支配層ということになり、これは李氏のいう五部に行き着く。

さらに、高句麗の政治体制の維持に対しては守墓人・烟戸を遅滞なく適正に徵発し、高句麗王以外のものによる不当な売買などを行わないことが、その正しきありようの基準となるわけである。そして、これを「碑文」の効力の主たる対象となった広開土王陵に則して言えば、そのように正しく配された守墓人・烟戸によって「洒掃」され

た広開土王陵の姿そのものが高句麗王権のあるべき形をまさに目に見える形で示すことに他ならない。その意味で守墓人・烟戸によって「洒掃」された、すなわち美しく保たれた広開土王陵は高句麗の政治・社会体制維持を具現する、高句麗王の側からみた可視的な表徴であつたともいえよう。

すなわち、広開土王陵を主な対象とした守墓の成否は王権の側からみた高句麗社会のありようを瞭然と示す目安となるのであり、この点からは支配階層である五部のみならず、守墓のための力役徴発の対象となつた基本的階層である「城民」「谷民」などをも含んだ高句麗を構成する一般的な人々をも一義的な意味で「碑文」の効力を期待する実際の対象であることが想定される。言いかえると広開土王の陵墓の近隣に居て、「洒掃」などの実際の効果を期待される対象となつた人々は直接的な意味では守墓人・烟戸であり、彼らを管理・監督した階層も含めて、彼らにとつては受動的な意味において、高句麗王権が「碑文」の効力を期待する対象とみなしたと考えたい。

いっぽう「碑文」の内容伝達という観点からは松原孝俊氏が興味深い考察を行っている。松原氏は広開土王碑に説かれた高句麗神話に注目し、「碑文」に刻まれた内容の背後には首尾一貫した豊富なストーリーの神話的世界があつたとし、とくに「碑文」のなかの「王、津に臨みて言いて曰く、『我は皇天の子、母は河伯の女郎、鄒牟王なり、我が為に腹を連ね、亀を浮かばしめよ』と。」という部分に注目し、このような文体は文字を媒体にしたものではなく、専門の話者が「劇的な語り口で、時には演劇的な所作をつけながら、時には太鼓やリユート系楽器伴奏によつて聴衆に吟詠し」たのであり、高句麗の神話・伝承はそのような口頭あるいは演劇的な要素もまじえた伝達形態をもつて浸透・定着したものと推定した。また、「是に於て碑を立て、勲績を銘記し、以て後世に示す。其の辞に曰く、…」という箇所の前後では、「曰く」を境にして広開土王の勲績が年代記的に記述され、それ以前とは質的に変化するとし、また「其の辞に曰く、…」から始まる部分については「碑文」の第一面6行目に記載されていた内容を転載・借用するときに使用されたのであり、ここにいる「辞」は文字だけでなく「語り部」たちも参与

しながら保管・整備されていったのであり、王朝伝承の継承には「朗誦様式の習得と伝達方法も確立していた」という推定も述べている⁽⁴⁾。

筆者は松原氏の見解を体系的にあるいは詳細に論評する能力を持たないが、日本古代の宮廷における語部や宣命を持ち出すまでもなく、前近代においては口頭における命令や口承による王権伝承が世界的にみても重要な位置を占めていたことは種々論じられるところである⁽⁵⁾。高句麗においても、王権神話の部分のみならず、その効力を期待される対象となった人々に対して広開土王碑文が口頭で音読されて伝えられたというのは、巨大な碑という人間の視覚をこえた媒体に書かれた文章であるため、実際の「碑文」文字のすべてが視認できたとは考えにくい点からも、十分に考えられることである。

李氏や松原氏の示した論点は、立碑の場所と伝達形態とは不可分であるという、いわば極めて妥当でありながら、これまであまり意識されてこなかった問題について、考察の端緒を開いたと言える。

碑文の布告および現実の効力を想定した対象の措定と彼らへの伝達方法という二つの観点から、筆者は広開土王碑文は、力役の徵発と守墓人・烟戸の正しき在り方に政治的に関わった支配層を一義的な対象としながらも、「法令宣布媒体」であり、「石刻文書」としての「碑文」の実際の拘束の対象が上記のような、三百三十戸の守墓人烟戸を作用点として発露すべき力役徵発装置としての領域支配の下にある高句麗の基本的構成層である人々をも理念的な対象としたと考える。そうであるとして、五部などの支配的階層に対して、音読、朗唱されるならばそれを聞く者との物理的距離を考慮した場所に立碑されねばならず、それが陵墓の墳丘上であったとはいかにしても考えにくい。また、私見のように「碑文」の効力が及ぶ理念的対象としては基層民である「守墓人・烟戸」とその背後に広範に広がる「城民」「谷民」をも含んでいたという立場にたつと、「碑文」内容の可視的表象たる広開土王碑の巨大な風骨はその所在する「國岡上」の地に立ち、そこへ守墓の任を負って来るべき高句麗の基層民を含めたすべて

の視覚にとって象徴的な位置に立てられねばならない。

このように、「碑文」内容の効力を期待された対象とその方法である伝達の形態という視点において、先学の「碑文」研究のなから文脈をたどっていけば、広開土王陵「碑文」が立碑された「墓上」とは墓すなわち「王陵のうえ」とは考えにくく、「墓のほとり」と考えるのがなんとしても妥当と思われる。

また、王陵にのみ特定の効力を期待された広開土王碑と最初にふれた中小墓の傍らから発見されている石柱とを無前提に関連づけることもしばらく措かねばならないであろうことも確認しておきたい。

6 王陵守護と「碑文」の政治的脈絡

「碑文」本来の意味内容と布告の対象、伝達の方法・手段などのいわば伝達・布告の媒体との両面から立碑の位置を考えてきたが、次に「墓上立碑」の効力を発する、すなわち対象となる陵墓について考えることによって、高句麗王権と社会のあり方をさぐってみたい。

碑文には「以甲寅年九月廿九日乙酉遷就山陵於是立碑銘記勲績以示後世」(第一面六行九字、三五字)とあって、この部分の釈字にはほとんど異見がなく、「甲寅年九月廿九日乙酉を以て、山陵に遷就す。ここに於いて碑を立て、勲績を銘記し、以て後世に示す」⁽⁴⁹⁾の山陵や碑文の主体は広開土王であることも、また疑う余地はなく、広開土王の「勲績を銘記」し、「後世に示す」ために碑を立てたという一点もまた動くことはない。しかしながら、これは広開土王の「顕彰碑」⁽⁵⁰⁾としての一つの目的を示すのであって、この目的との最終的な因果関係となる第四面の「守墓人烟戸」の「差錯」を禁じた部分とは碑文としての文脈をもつのは当然であるが、この脈絡そのものが「守墓人烟戸」の「差錯」を禁じた対象となる陵墓を限定するものであるかどうかは別の問題であろう。

これまでの諸研究では、「墓上立碑」のなされた、対象となる陵墓を特定するうえで、「碑文」中の関連する箇所、すなわち「唯國岡上廣開土境好太王盡爲祖先王墓上立碑銘其烟戸不令差錯」（第IV面八行十四〜四十一字）の部分の意味についても、「祖王・先王すべての王墓」とに、はじめて立碑・銘戸を実施したのは広開土王自身であって、それ以前は石碑を安置しなかったという⁵¹⁾と解されることが多い。そして、この「立碑・銘戸」の対象となつた「守墓人」については、たとえば武田幸男氏は「広開土王墓を守護するために高句麗領域の各地から徴発された烟戸」が「守墓人烟戸」「守墓戸」「烟戸」「守墓人」のように表現されており、これらには「國烟」と「看烟」の類別があると述べている。さらに「広開土王墓の守墓人烟戸は：」とか「広開土王は生前すでに自分の墓を守護する守墓人烟戸に自ら略来してきた新来の韓・穢人を当てる意向であつたという」とか「王都と王墓が存する国岡上の地で、広開土王墓を守護するという国家的労役を指定された国烟は：」と端的にふれているように、広開土王碑文の守墓人烟戸条は「広開土王墓の陵墓を守護する国家的な力役徴発の体制」に関心をおいて記されたものである考えるのが一般的であり、かつて筆者も、これを穩当と考えていた⁵²⁾。

しかしながら、そのような理解のいっぽうでは「唯國岡上廣開土王境好太王盡祖先王爲：」という碑文の記載が問題となり、一般的な理解からすれば、広開土王代にそれ以前のすべての王陵に碑が立てられることになつたことになる。また、この文の前には「自上祖先王以来墓上不安石碑致使守墓人烟戸差錯」（第IV面七行三三〜八行十三字）という文があり、これはふつう、「上祖・先王自り以来、墓の上に石碑を安んぜず、守墓人の烟戸を使って、差錯せしむるにいたれり」、すなわち、広開土王以前の「上祖・先王」の陵墓には、「墓の上」に石碑がなかったために、守墓人の烟戸が差錯するにいたつた、と解されるが、もともと石碑がないとした広開土王陵以前の祖先王たちの陵墓の候補となる大型の古墳からは、これまでのところ、「碑文」の解釈によつて広開土王が立碑したとされる碑は発見されていない。

「碑文」のこの箇所と広開土王陵のみで碑が発見されている事実に関しては、広開土王碑がひとり広開土王陵のみに対して立てられたものではなく、広開土王陵のつくられた集安平野の一部をさす「碑文」中の文字である「國岡上」にある広開土王陵に先立つ陵墓に対する「守護・洒掃」すべきことを記した碑であるとみる見解がある。浜田耕策氏は「碑文」に記された守墓人の数について、『三国史記』高句麗新大王条にみられる宰相の墓の守護に二〇家があてられたという記述とくらべても、「碑文」に記された三〇の国烟と三〇〇の看烟、あわせて三三〇という守墓人の数は、「好太王がいくら英傑であつたとはいえ」、「多すぎはしないだろうか」として疑念を示している。そしてさらに、高句麗の諡号には「國岡上広開土境平安好太王」のように、王陵の名または王陵の所在地の名を冠する例のなかで、広開土王の「祖王」である故国原王は『三国史記』に「故国之原」に葬られたとあり、別に「國丘上王」ともいわれたことから、その王陵は國岡上にあり、また、「先王」である故国壤王は「故国壤」に葬られたというが、この「故国壤」の地は故国の原と同一地または同一地域とみてよいから、故国壤王陵も故国原王陵とおなじく、「國岡上」にあつたことになるとする。そして、「故国之原」と「故国壤」の「国」の字は「國岡上」の「国」に通じるものであり、平壤遷都後、その地名に「故」という文字が冠せられたとみる。すなわち、浜田氏は長寿王が父である広開土王陵を築くにあたつて、祖王と先王の眠る「國岡上」つまり国岡の地を墓地として選定したのであり、広開土王碑は國岡上にすでにある祖・先王の守墓人・烟戸をも改組して、広開土王陵と合わせて、三つの王陵の守墓人・烟戸を総括的に定めたとみている。このような理解によつて「碑文」に記された三〇の国烟と三〇〇の看烟は、故国原王、故国壤王、広開土王の三陵墓に対して、それぞれ一〇の国烟と一〇〇の看烟からなる三組に分けて考えれば、「碑文」に記された守墓人の総数は「けつして多きにすぎることとはなくなり、また、「国」字に由来した国烟の理解もいっそう首肯されるのではないだろうか」と述べている。そして、浜田氏は広開土王碑文に銘記された三三〇の守墓人・烟戸は、國岡上にある広開土王とその先王である故国壤王、祖王である故国原王

の三王陵を「守護・洒掃」すべきものであると結論づけている。⁽⁵⁵⁾

同様に金賢淑氏も、「碑文」の守墓人・烟戸について、集安にある全王陵の守護を担当したとみるほうが妥当だとし、「碑文」は集安所在の全王陵に対する守墓役に関する内容を表したものとみる。そして、「碑文」が広開土王による制定と長寿王による施行で完成をみた守墓制の再編であつて、広開土王一基のみに該当するものではなく、当時の高句麗の全王陵の守墓役に対する体制の強化と整備であつたと位置づけている。⁽⁵⁶⁾

王陵の存在した墓域については、武田幸男氏も「国」とは国内城の所在地であり、広開土王陵とその墓碑が現存する国岡上は吉林省集安の地を意味するとし、また、「国原」「国壤」「国川」「国岡」なども表記されたとみている。⁽⁵⁷⁾

筆者も基本的としては「故国原」とか「國岡上」と呼ばれた王陵地帯を想定し、そこには広開土王陵の他にも故国原王陵と故国壤王陵が存在すると考える。そして、「碑文」の「守墓人・烟戸」の力役は、「故国原」あるいは「國岡上」に存在する広開土王陵以外の王陵にも、その効力の対象となつたという見解をとりたい。なぜならば、「碑文」の該当部分は「…好太王盡爲祖先王墓上立碑」とあり、これは「ただ好太王（広開土王）のみが、すべての祖王・先王のために広開土王碑を立てたのであり」と解されるから、ここにかかるとすれば「其烟戸不令差錯」は「すべての祖王・先王」の陵墓の守墓人・烟戸に対しての効果を期待したものと考えざるをえないからである。このような「碑文」自体の文脈からは、広開土王碑の守墓行為は広開土王陵とそれ以前に「故国原」あるいは「國岡上」に存在したすべての王陵に対する「守墓・洒掃」行為を意味するものと考えられるのである。

ここで「故国原」あるいは「國岡上」に存在した全ての王陵とは、「丸都城」とも記載された現在の集安の地へ、その治世十三年（二〇九）に移都した山上王（第十代）から、広開土王までの全てを対象とするよりも、むしろ武田幸男氏の指摘する諡号に「国」字を含む王系と考えたい。⁽⁵⁸⁾ただし、諡号に「国」字を含む王としては山上王の前

王である故国川王（第九代）も系図的には記載されているが、これは山上王以前の大祖大王（大祖王、国祖王とも別記される）とともに、四世紀末から五世紀初頭の広開土王代頃に系譜上に加えられた架空の王と考えられる⁽⁶⁾。

よって、平地城としての「国内城」整備以降の王系は、その治世十二年（三四二）に国内城を築いたと記される故国原王（第十六代）以降の小獸林王（第十七代）、故国壤王（第十八代）、広開土王（第十九代）の四王である。

このなかで小獸林王については、葬地が小獸林となっており、「国」字を含まないが、「国」の訓をその王名と葬地に含んでいるので、本来は諡号に「国」字を含んでいたと考えられている⁽⁶⁾。諡号あるいは葬地に「国」字を含み、なおかつ実在した王の系譜は国内城を築いた故国原王に始まり広開土王にいたるのであって、国内城に王都が置かれていた時期の王陵すべてについて、「守墓人・烟戸」条はこれらを対象とし、実効力の発現を期待されたものと考ええる。

太王陵や將軍塚には周囲を囲む土塁や陪墳とみられる小古墳および近隣の建築遺構などが知られているが、これらの総体が王陵としての「陵園」のような構成をもつものとも考えられている⁽⁶⁾。しかし、広開土王碑はさらにその外側にあり、これが確実であるならば、一つの王陵のみに帰属するものではないことを示していると考えたい。

すなわち、その後、平壤に遷都する長寿王が広開土王陵をはじめとし、「國岡上」の地に所在するすべての「祖王・先王」の陵墓の「守墓人烟戸」の「差錯」をふせぎ、これによってそれらの陵墓の永劫の安寧を祈念し、さらにはこれを実行するために後世に伝え示す機能をもたせるべく、「國岡上」に立碑したものが広開土王碑であって、それは相対的位置觀念としては、すべての国内王系の王陵の「ほとり」に立碑したものであったのである。このような意味をもつ広開土王碑の立碑の背景には武田氏の指摘するように国内城の築造とそれにもなう国内王系の系譜意識の高まりによる高句麗「国」の拡大、確立がある⁽⁶⁴⁾。そのような光源のなかでこそ、あらたに支配した広大な領域から「守墓人烟戸」を徴発することを力点とし、それによって未来永劫の広開土王につながる歴代王陵の守護

という作用点による高句麗国家体制維持の可視的表徴という点に、実に救国の英主としての広開土王の姿がその像を結ぶことになるのである。それゆえに、広開土王碑文の守墓・洒掃に関する効力の対象とその具体的な王陵については私見との違いはあるにしろ、すでに浜田耕策氏が、「碑は第一義的には守墓人烟戸の集落に属し、しかもこの守墓人烟戸が碑と同じく「國岡上」にある故国原王と故国壤王と広開土王の三代の陵墓を守墓洒掃するものであれば、碑が將軍塚あるいは太王陵に属するとする対立した見解が現れたその釈然としない立地も理解できる」と看破しているように、これまでながらく広開土王陵否定の重要な根拠とされてきた、主として將軍塚と太王陵を対象とした広開土王碑との位置関係や距離という問題も、物理的な観点からだけでは決定的な根拠とはなしえないと考える。

すなわち、広開土王碑の位置は碑文自体の「墓上立碑」にまつわる箇所から措定するかぎり、広開土王陵の「ほとり」「かたわら」ではあるが、それは物理的あるいは絶対的な距離を限定するものではなく、むしろ、立碑による効力を期待すべき「國岡上」の地において、広開土王に連なる王陵との相關的な位置づけを示す、すぐれて觀念的な字義を發露するものととらえられるのである。

7 論点の整理

これまで述べたつた論点を以下に整理しておきたい。

まず、広開土王碑文にみえる「墓上立碑」とは墓の「うえ」に碑を立てることではありえず、字義の上からも、あくまで墓の「ほとり」「墓側」に碑を立てるということであることを確認し、集安の二基の古墳から発見されている石柱は、すくなくとも広開土王碑文の「墓上立碑」と直接には関係させることは難しいものと考えた。また、これに加えて中国の「冢上祠堂」の記述や考古学の実例をも傍証として瞥見した。

次に、広開土王陵の「ひとり」とは具体的にはどのような相対的位置関係を指し示すのかという問題について、碑文自体の再吟味から接近しようと試みた。その結果、碑文にみられる守墓人・烟戸条は広開土王陵と同じ「國岡上」に所在するすべての祖・先王たちの墓と墓域、すなわち故国原王、小獸林王、故国壤王、広開土王の四王陵を対象とし、その実効力を期待されたものと考えるにいたり、未来永劫の歴代王陵の守護を作用点とした高句麗国家体制維持の可視的な表徴であることにふれた。そして、宣布媒体としての広開土王碑は、その対象となる階層によって、五部などの支配層に対しては音説による聴覚的な宣布が、基層民には碑石全体の視認による効果とがそれぞれ期待されていたと考えた。このような考察の帰結に付随して、広開土王碑と広開土王陵との「近さ」の程度という物理的な位置関係は、立碑意図や目的とは直接にはかかわらないと考えられることになった。これを王陵比定の議論との関係から論ずるならば、広開土王陵と碑の絶対的な「近さの程度」に拘泥する必要はなく、碑との距離を王陵比定の論拠として矮小化する必要はないと考える。

目にみえる碑石やそこに刻まれた文字から、不可視の高句麗人の精神や習俗さらには、これを擬とした王権と支配体制のありようなど、問題は多岐にわたり、屋上に屋を重ねることとなったが、多くの識者に指正をたまわり、確固とした論点と、新たな史眼をもちたく思う。

注

(1) この部分の積文の異動については以下の文献に詳しい。

白崎昭一郎『広開土王碑文の研究』吉川弘文館 一九九

三年 三三〇～三三六頁。

耿鉄華『好太王碑集釈集解』『好太王碑新考』吉林人民

出版社 一九九四年

なお、以下で、とくに広開土王碑文の文字を指す場合は

「國岡上」などのように碑文の表記を使用している。

(2) 佐伯有清『古代史演習 七支刀と広開土王碑』吉川弘

文館 一九七七年 四六～四七頁。

(3) 武田幸男「附録一『広開土王碑文』積文」および「附

録二『広開土王碑文』釈読」『高句麗史と東アジア』岩

波書店一九八九年

以下、武田积文、武田积読とする。本稿では、とくに異見や異論を提示する場合の他は、武田积文を基調としてゐる。

- (4) 白崎昭一郎『広開土王碑文の研究』(前掲) 三三〇～三三六頁参照。

耿鉄華『好太王碑集釈集解』(前掲)

- (5) 同様に「立碑銘」と切る釈読は白崎昭一郎も採用している。『広開土王碑文の研究』(前掲) 三三三頁。

- (6) 武田氏と同じく、「銘其烟戸」で区切る釈読を明確にした論者の一人としては福宿南嶋氏があげられる。ただし、福宿氏はこの部分を「其の烟戸を銘とし」と読む。福宿南嶋『好太王碑文を読む』(『書道研究』創刊号) 一九八七年

なお、「差錯」の「差」字は「羌」字に似ており、少数意見として、実際に「羌錯」と読んだ見解もあるが、隸書の「差」字は「羌」字とよく似ており、碑文の文脈から考えても「差錯」であることは間違いない。

王健群『好太王碑研究』吉林人民出版社 一九八四年*
日本語訳は『好太王碑の研究』雄渾社 一九八四年 二三七頁。

白崎昭一郎『広開土王碑文の研究』(前掲) 三三一～三三二頁。

耿鉄華『好太王碑新考』(前掲) 三三二頁。*などを参照。

- (7) 方起東・林至徳「集安洞溝両座樹立石碑の高句麗古墓」(『考古與文物』一九八三・一二) *

吉林省文物志編委會『集安県文物志』一九八三年 九四～九六頁。*

- (8) 方起東・林至徳「集安洞溝両座樹立石碑の高句麗古墓」(前掲)

- (9) 方起東・林至徳「集安洞溝両座樹立石碑の高句麗古墓」(前掲)

吉林省文物志編委會『集安県文物志』(前掲) 九四～九六頁。

- (10) 方起東・林至徳「集安洞溝両座樹立石碑の高句麗古墓」(前掲)

- (11) 吉林省文物志編委會『集安県文物志』(前掲) 九三～九四頁。

吉林省地方志編纂委員會編『吉林省志』卷四三文物志
吉林文物出版社 一九九一年 二四四頁。*

ただし、後者の文献では墓碑の出現および「墓上立碑」と関連させて、この石製人像が生前の墓主人の姿を刻んだ墓碑と考えている。

- (12) 鳥居龍蔵「南満洲調査報告」『鳥居龍蔵全集』第十巻
朝日新聞社 一九七六年

- (13) 方起東・林至徳「集安洞溝両座樹立石碑の高句麗古墓」(前掲)

同様の見解として吉林省考古研究室・集安県博物館「集安高句麗考古的新収獲」(『文物』一九八四・一一) がある。

(14) 方起東・林至徳「集安洞溝兩座樹立石碑の高句麗古墓」(前掲)

(15) 方起東「千秋墓、太王陵、將軍塚」王健群・賈士金・方起東「広開土王碑と高句麗遺跡」四、五世紀の東アジアと日本」読売新聞社 一九八八年

(16) 池内宏「通溝」巻上 日滿文化協会 一九三八年

(17) 方起東「千秋墓、太王陵、將軍塚」(前掲)

(18) 池内宏「通溝」巻上(前掲) 六九〜七〇頁。

(19) 今西龍「広開土境好太王陵碑に就いて」『朝鮮古史の研究』 国書刊行会 一九七〇年復刊

(20) 武田幸男「高句麗史と東アジア」(前掲) 四一〜四二頁。および五六〜五七頁の注⑨

同様の「上」(ほとり)の使用例は『三国史記』にもみえる。広く著聞する記述のなかに一例を見出だと、たとえば、巻十三・高句麗本紀・始祖東明聖王の高句麗建国のくだりでも、朱蒙が卒本川にいたったが、その土壌は肥えているうえに山河は險固であつたのをみて、この地に都を定めようとしたが、宮室を作る時間がなかったで、「但結廬於沸流水上居之、国号高句麗、因以高為氏。」、とあり、これは「沸流水のほとり(上)に家を建てて住み、国号を高句麗と呼び、よつて高を氏とした」と解されるように、この「上」も「ほとり」という用法に他ならない。

この他に、「墓上」の「上」を明確に「ほとり(辺り)」と解釈しているのは、福宿南嶋「好太王碑文を読む」

(前掲) などがある。

(21) 朴時亨原著 全浩天訳「広開土王陵碑」そして 一九八五年 二六五〜六頁。

(22) 李亨求・朴魯姫「広開土大王陵碑新研究」同和出版社 一九八五年 一一〇頁。*

(23) 楊寛「中国皇帝陵の起源と変遷」学生社 一九八一年 五五〜六〇頁。

(24) 『史記』孔子世家第十七「唯子貢廬於冢上、凡六年、然後去。」

現代語訳は小川環樹・今鷹真・福島吉彦共訳『史記世家』(中) 岩波書店 一九八二年 三二四〜三二五頁を参考にした。

(25) 『史記』呉太伯世家第一「将死曰、樹吾墓上以梓、令可為器。抉吾眼置之東門。以觀越滅呉也」

現代語訳は小川環樹・今鷹真・福島吉彦共訳『史記世家』(上) 岩波書店 一九八〇年 二八〜二九頁を参考にした。

(26) 『史記』晋世家「重耳謂其妻曰、待我二十五年、不來乃嫁。其妻笑曰、掣二十五年、吾冢上柏大矣、雖然妾待子。」

現代語訳は小川環樹・今鷹真・福島吉彦共訳『史記世家』(上) (前掲) 三〇六〜三〇七頁を参考にした。

(27) 張衡「冢譜」『古文苑』巻五

載輿載歩、地勢是觀。降此平土、陟彼景山。一升一降、乃心斯安。爾乃隳巍山、平險陸、刊藁林、鑿盤石、起峻

甕、構大棹。高岡冠其南、平原承其北。列石限基壇、羅竹藩其域。系以脩埭、洽以溝瀆。曲折相連、迤靡相屬。乃樹靈木、靈木戎戎。繁霜峨峨、匪雕匪琢。周旋顧盼、亦各有行。乃相厥宇、乃立厥堂。直之以繩、正之以日。有覓其材、以構玄室。奕奕將將、崇棟庑宇。在冬不涼、在夏不暑。祭祀是處。脩埭之祭、亦有掖門。掖門之西、十一余半、下有直渠、上有平岸。舟車之道、交通旧館。塞淵慮弘、存不忘亡。恢厥庑壇、祭我兮子孫。宅兆之形、規矩之制、希而望之以麗。幽墓既美、鬼神既寧、降之以福、于以之平。如春之卉、如日之升。

(28) 『水經注』卷二一 洧水

逕漢弘農太守張伯雅墓。塋域四周、壘石為垣。隅阿相降。列於綏水之陰。庚門表二石闕、夾對石獸於闕下。冢前有石廟、列植三碑。碑云德字伯雅、河南密人也。碑側樹兩石人。有數石柱及諸石獸矣。旧引綏水南入塋域、而為池沼。沼在丑地、皆蟾蜍吐水、石隄承溜。池之南、又建石樓、石廟前、又翼列諸獸。

『水經注』には他にも「冢」と「石廟」との関係が記されている箇所が多い。これについては、楊寛『中国皇帝陵の起源と変遷』(前掲)一〇八—一二二頁など参照。

(29) 佐原康夫「漢代祠堂画像考」(『東方学報』六三)一九一一年

Victor Sealen, Gilbert de voisins, Jean Lartigue, L, art Funeraire a l'epoque des Han, Mission Archeologique en China (1914) I, Paris, 1935, p. 194

(30) 『太平御覽』卷三六一所引 風俗通

汝南周霸、字翁仲、為太尉掾。婦於乳舍生女、自毒無男。時屠婦比臥得男、因相與私貨易、裨錢數万。後翁仲為北海相。吏周光能見鬼、署為主簿、使還致敬於本郡鬼。因告光曰、事訖、臘日可與小兒俱上冢。去家經十三年、不躬蒸嘗。守墓微察知、相先君寧息、会同飲食忻娛否。往到於冢上、郎君沃醑。主簿俛伏在後、但見屠者弊衣蠶結、踞神坐、持刀割肉。有五時衣帶青墨綬數人、彷徨陰堂東西廂、不敢來前。(後略)

なお、(27)～(30)の文獻およびその釈読については佐原康夫「漢代祠堂画像考」(前掲)から得たところが大きい。

(31) 佐原康夫「漢代祠堂画像考」(前掲)

(32) 蔣英炬「孝堂山石祠管見」南陽漢代画像學術討論会并公室編『漢代画像石研究』文物出版社 一九八七年

(33) Wilma Fairbank, "A Structural Key to Han Musical Art" Harvard Journal of Asiatic Studies vol. 7, no. 1, 1942 fig. 6

(34) 南京博物院「徐州青山泉白集東漢画像石墓」(『考古』一九八一—二) *

(35) 徐州市博物館編『徐州漢画像石』江蘇美術出版社 一九八五年 四七〇—八九、解説の五頁 *

王德慶「江蘇銅山東漢墓清理簡報」(『考古通訊』一九五七—四) *

(36) 天津市文物管理处考古隊「武清東漢鮮于璜墓」(『考古

学報』一九八二—三）＊

(37) Wilma Fairbank. ibid.

(38) 佐原康夫「漢代祠堂画像考」(前掲)

(39) 塚田康信・和田圭壮「高句麗壁画古墳の墓誌について」(『広島文教女子大学紀要』人文・社会科学編二五)一九九〇年

(40) 井上秀雄「古代東アジアの文化交流」溪水社 一九九三年 二五八—二六五、三三七—三八二、三八五頁。

(41) 浜田耕策「高句麗広開土王陵否定論の再検討」(『朝鮮学報』一一九・一二〇)一九八六年

(42) 耿鉄華「好太王碑新考」(前掲) 九六—一〇〇頁および一三六—一三九頁。＊

(43) 信立祥「論漢代的墓上祠堂及其画像」南陽漢代画像石學術討論會弁公室編『漢代画像石研究』文物出版社 一九八七年＊

信立祥「中国漢代画像石の研究」同成社 一九九六年

とくに後者は大部の論考であるが、二四四頁で、漢代の「墓上祠堂」に対しての端的な表現として、画像石墓の「地下墓室の真上の墳丘の麓に建てられた墓地の祠堂である」と述べている。

(44) 武田幸男『高句麗史と東アジア』(前掲) 五六頁。

(45) 武田幸男『高句麗史と東アジア』(前掲) 五四—五五頁。

(46) 李成市「表象としての広開土王碑文」(『思想』八四二)一九九四年、同・「広開土王碑の立碑目的と高句麗

の守墓制」(『高句麗研究』2) 一九九四年＊

(47) 松原孝俊「神話学からみた『広開土王碑文』」(『朝鮮学報』一四五)一九九二年

(48) 出水慈子「口承の荷担者—古代ケルト、古代日本、西アフリカ(バンバラ、フルベ)の事例について」(『大東文化大学紀要』三二)一九九四年

(49) 池田源太「伝承文化論考」角川書店 一九五八年 など。福宿南嶋氏は「遷就山陵」の「就」を「敦」字とみて、この部分を「敦九山陵に遷す」と釈読するが、それ以外の研究者は、ほぼ「就」と読んで一致をみている。福宿南嶋「好太王碑文を読む」(前掲) また、「以示後世」の「示」はかつて横井忠直や今西龍によって「永」と読まれたこともあったが、その後は「示」として確定をみている。

横井忠直「高句麗好太王碑文」(『会余録』第五集) 一八九九年

今西龍「広開土境好太王陵碑に就いて」(前掲)

(50) 浜田耕策「高句麗広開土王碑碑文の研究—碑文の構造と史臣の筆法を中心として」(『朝鮮史研究会論文集』一

二)一九七四年 五〇頁。など

(51) 武田幸男『高句麗史と東アジア』(前掲) 四一頁。

(52) 武田幸男『高句麗史と東アジア』(前掲) それぞれ四一頁、三六頁、三七頁、三八頁、三九頁。

(53) 門田誠一「瓦からみた高句麗の守墓制と領域支配」(『文化史学』四七) 一九九一年

(54) この部分についての直接的な解釈としては、福宿南嶋

氏が「好太王だけが、(初めて) すべての歴代の王墓の近い所に、この碑を立て守墓の民戸を刻してその間違いを生じさせないようにしたというのである」と端的にふれている。「好太王碑文を読む」(前掲)

(55) 浜田耕策「好太王碑文の一、二の問題」(『歴史公論』八一四)一九八二年 および「高句麗広開土王陵(否定論の再検討)」(前掲)

(56) 金賢淑「広開土王碑を通してみた高句麗守墓人の社会的性格」(『韓国史研究』六五)一九八九年*

(57) 武田幸男「高句麗史と東アジア」(前掲)三八〜三九頁。および四「国内城の成立と高句麗「国」」

(58) 武田幸男「附録一『広開土王碑文』釈文」および「附録二『広開土王碑文』釈読」(前掲)

(59) 武田幸男「国内城の成立と高句麗「国」」(「丸都・国内城の史的位置」のうちの一項)『高句麗史と東アジア』(前掲)

(60) 武田幸男「丸都・国内王系の加上問題」(「高句麗王系成立の諸段階」のうちの一項)『高句麗史と東アジア』(前掲)

なお、大祖大王(第六代)、次大王(第七代)、新大王(第八代)のいわゆる大王王系がすべて架上されたとみる説としては、津田左右吉、池内宏の見解がよく知られている。

池内宏「高句麗王家の上世の世系について」(原載は

『東亜学』三 一九四〇年)

池内宏「高句麗の建国伝説と史上の事実」(原載は『東洋学報』二八〜二 一九四一年)『満鮮史研究』上世編祖国社 一九五一年

津田左右吉「三国史記高句麗紀の批判」(原載は『満鮮地理歴史研究報告』九 一九二二年)『津田左右吉全集』十二 岩波書店 一九六四年

これに対して三品彰英の反論が出されている。三品彰英「三国史記高句麗本紀の原典批判」(『大谷大学研究年報』一九五三年)

(61) 武田幸男「高句麗王系成立の諸段階」(「丸都・国内城の史的位置」『高句麗史と東アジア』(前掲)

(62) 鳥居龍蔵「南満洲調査報告」(前掲)

(63) 西谷正「高句麗王陵コンプレックス」(『史淵』一三四)一九九七年

(64) 武田幸男「国内城の成立と高句麗「国」」(「丸都・国内城の史的位置」のうちの一項)『高句麗史と東アジア』(前掲)

(65) 浜田耕策「高句麗広開土王陵墓比定論の再検討」(前掲)

(末尾に*をつけたものは外国文)

図出典

図1-1、2とも方起東・林至徳「集安洞溝両座樹立石碑の高句麗古墓」(『考古与文物』一九八三〜二)

図2—Wilma Fairbank, “A Structural Key to Han Musical Art” *Harvard Journal of Asiatic Studies* vol.7, no. 1, 1942 fig.6

付記

本稿の内容の一部は第9回東アジア古代史・考古学研究会（一九九七年十二月六日、於・同志社新島会館）で口頭発表したものである。そのおり、福岡大学・小田富士雄、東京大学・早乙女雅博、京都府埋蔵文化財調査研究センター・松井忠春、名古屋市見晴台考古資料館・木村光一をはじめとした諸先生より、ご助言とご教示をいただいた。末筆ながら記して謝意を表します。

本稿は一九九八年度佛教大学特別研究費の給付成果の一部である。